## 3．参加型アセスの仮想実施例

### （1）仮想実施例の位置付け

ここで紹介するものは、これまでに述べてきた参加型アセスの考え方で実施した場合の仮想事例です。

事業計画に至るまでの経緯、住民等の動向をもとに、事業者どのように判断し、どのタイプを選択し、アセス・ファシリテーターをだれにしたか、手続きの段階でどのようなコミュニケーション・ツールを採用し、結果をどのように判断したかを示しました。この例のように、４つのタイプ（31 頁参照）は明確に区別されるのではなく、コミュニケーションの目的によってさまざまな組合せがあるものと考えられます。

これは仮想ですが、実際の取組み事例が土台になっています。この事例のように、住民等とのコミュニケーションを考える上では、事業の規模や種類、地域環境の特性などもさることながら、住民団体等がそれまでにどのような取組みを蓄積しているかが大きな要因となる場合があると考えられます。

また、コミュニケーション・ツールの活用として、ワークショップについての設計と運営例を紹介しています。

### （2）仮想実施例の事業概要と経緯

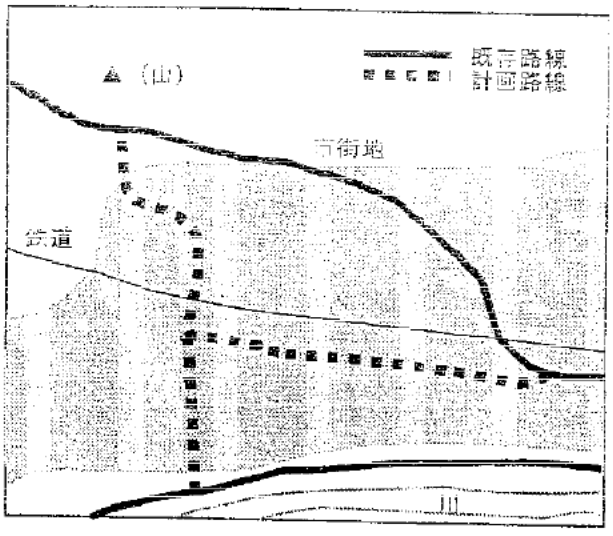
○事 業 名　Ｂ市都市計画道路整備・環境影響評価

○事業概要　市街地に２本の４車線幹線道路（高架部を含む）を整備。総延長９ｋｍ。

○経　　緯

約 30 年前に計画決定したが、住民の反対もあり、事業化されていなかった。大火により用地買収の条件ができ、今後の防火・防災を考えて事業化を決定。

既存測定局の値や類似路線の交通量などからの推定で作成した「環境調査報告書」により説明を行ったが、理解を得られず、議会の指摘もあり、制度に準じてアセスを実施することとなった。



## （3）仮想実施例

### ケース１「情報開示強化型」での実施例

【住民等の動向】

事業化決定は「寝耳に水」と反発。沿道の自治会を中心に連絡会を結成して、事業化に反対する運動を展開している。離れた場所にある既存測定局データによる「環境調査報告書」では不十分と指摘している。しかし、慢性的な渋滞が問題になっている既存幹線道路沿道の住民等の一部には異論がある。

【事業者の判断】

「環境調査」を実施した上に、住民等の要求によるアセスの実施である。十分に説明すれば、事業は交通流の円滑化につながり、公害の恐れがないことは、より理解がえられる。

【重視するテーマ】

沿道大気汚染の市街地住民に及ぼす影響の程度

【アセス・ファシリテーターをだれにしたか】

コミュニケーションの担当職員を設置

【コミュニケーション計画の概要】

| | | |
|---|---|---|
| 方法書の段階 | 縦覧、意見募集 | 住民団体に方法書を配布し、概要書は全戸配布。 |
| | 自主的な説明会 | 地域別説明会の他、住民団体との懇談会を開催 |
| | まとめ | 意見と見解をホームページ等で公表 |
| 準備書の段階 | 縦覧、意見募集 | 方法書段階に同じ |
| | 説明会 | 方法書段階に同じ |
| | まとめ | 方法書段階に同じ |
| 評価書 | | 縦覧の他、住民団体等に配布 |
| 事後調査 | | 事後調査報告書を、縦覧の他、住民団体等に配布 |

【実施結果の総括】

情報開示と逐次説明に訪問する姿勢は歓迎された。

しかし、予測交通量の設定では最後まで平行線となったため、大気汚染の影響について共通理解を得るには至らなかった。

また、地域別説明会において、既存幹線沿道の住民とその他の地域の住民との意見の違いが判明し、この段階での解決に至らなかった。

## ケース２「対話推進＋監視参加型」での実施例

【住民等の動向】

事業化決定は「寝耳に水」と反発。自主的に大気汚染、騒音についての簡易法による環境調査と住民健康アンケートを実施して、離れた場所にある既存測定局データによる「環境調査報告書」では不十分と指摘している。しかし、慢性的な渋滞が問題になっている既存幹線道路沿道の住民等の一部には異論がある。

【事業者の判断】

事業者である市が行うアセスへの不信感が強く、適正な実施であることを示す必要がある。計画の枠組みの変更はありえないが、環境保全対策では協議の余地がある。

【重視するテーマ】

事業者への信頼回復を図る。

【アセス・ファシリテーターをだれにしたか】

アセスのコンサルタント会社の担当者が実施

【コミュニケーション計画の概要】

| | | |
|---|---|---|
| 方法書の段階 | 検討の過程 | 反対している住民団体と懇談会を開催 |
| | 縦覧、意見募集 | 懇談会により反映したことを説明に訪問し、配布。 |
| | 自主的な説明会 | 地域別の他、大気汚染、騒音、景観の３分野別に開催 |
| | まとめ | 意見と見解をホームページ等で公表 |
| 準備書の段階 | 作成の過程 | 調査・測定・検査への立会い見学会を開催 |
| | 縦覧、意見募集 | 方法書段階に同じ |
| | 説明会 | 分野別説明会において、コンピューター・グラフィックスをお互いが使いあって、意見交換 |
| | まとめ | 方法書段階に同じ |
| 評価書 | | 報告・懇談会を開催（資料として配布） |
| 事後調査 | | 年に１回、報告・懇談会を開催（配布） |

【実施結果の総括】

住民等の意見を受けて測定個所を増やした。また、コンピューター・グラフィックスを使った分野別説明会では、お互いが同じ機材とソフトを使って、感度分析や景観の変化予測などを行ったことは歓迎された。そして、その結果をふまえた高架立ち上がり部での環境保全策を盛り込むなどの姿勢が評価された。

しかし、交差点部分での拡散モデルの信頼性に対しては、一部の住民に根強い抵抗感があった。また、高架部の景観問題は平行線をたどったが、景観デザインのワークショップを開催するよう住民から提案があり、道路の詳細設計において行うことを約束したことは評価された。

## ケース３「監視参加＋計画参加型」での実施例

【住民等の動向】

事業化決定は「寝耳に水」と反発。自主的に大気汚染、騒音、健康、景観について簡易法による環境調査などを実施。離れた場所にある既存測定局データによる「環境調査報告書」では不十分と指摘。２車線化の代替案も示した。しかし、慢性的な渋滞が問題になっている既存幹線道路沿道の住民等の一部には異論がある。

【事業者の判断】

周辺開発の動向もあり、交通量予測は難しく、不確定要素が大きい。住民等から出されている代替案も視野に、今後のまちづくりを考え、信頼関係の修復を図る観点から、柔軟に検討をすすめる。

【重視するテーマ】

持続可能な地域づくりへの住民参加

【アセス・ファシリテーターをだれにしたか】

住民団体を支援していた環境ＮＰＯが、アセス・コンサルタント会社の下請けに入る形で、業務を請け負ってもらった。

【コミュニケーション計画の概要】

| | | |
|---|---|---|
| 方法書の段階 | 検討の過程 | 公募者を含む意見交換会、環境診断マップやカードを使ったワークショップを開催 |
| | 縦覧、意見募集 | ホームページ上に意見交換コーナーを開設（ファシリテーターが管理） |
| | 自主的な説明会 | 地域別の他、大気汚染、騒音、景観の３分野別に開催 |
| | まとめ | 集まった一般意見をふまえた意見交換会を開催 |
| 準備書の段階 | 作成の過程 | 調査・測定・検査への立会い見学会を開催<br>簡易測定法による大気汚染と音環境の測定 |
| | 縦覧、意見募集 | 方法書段階に同じ |
| | 説明会 | 最終で総括説明会を催し、投票ゲームとコンセンサス会議方式のワークショップを開催 |
| | まとめ | 方法書段階に同じ |
| 評価書 | | 報告・懇談会を開催（資料として配布） |
| 事後調査 | | 住民団体に簡易法による年４回の調査を委託 |
| | | 年に１回、報告・懇談会を開催（配布） |

※ワークショップをどのように行ったかは表 24（45 頁）を参照して下さい

【実施結果の総括】

環境診断マップにより、大火後の低・未利用地での安全やアメニティの問題が浮上した。住民等の提案を踏まえて路線の一部区間について景観重視の早期整備で合意が成立した。高架部の景観問題は平行線だったが、投票ゲームを通じて焦点となった既存幹線道の環境保全策（防音壁や街路樹の整備等）を盛り込んだことが評価された。

## （4）ワークショップの設計と運営

### ①設計上の留意点

参加型アセスでのワークショップは、具体的な調査・予測・評価の方法や環境保全対策に絞り込むまでの流れを、参加者の納得の上ですすめるための手法です。

参加型アセスでは、参加する人々（事業者と住民等の双方）の得心を獲得するために、時間的な制約を念頭におきつつ、なるべく早くから取組みを開始し、方法書段階から準備書段階の流れの中で、参加者間の相互理解と環境保全に関する認識が高まっていくように設計する必要があります。

なお、アセス・ファシリテーターが最も慎むべきことは、自分の知識の範囲内に参加者間の対話を閉じ込めてしまったり、環境に対する自分の思想や好みを押し付けたりすることです。

また、事業者は、上記のことを理解して、ファシリテーターが活動しやすい時間的な余裕やスタッフを動かせる予算的な手立てを準備しておく必要があります。

### ②ワークショップの設計

ワークショップは、アセスの手続きのどの段階で実施するかに応じて、活用する手法を工夫します。組み立てに際しての考え方を図5に示しました。

ワークショップを何回、どの段階で実施するかは、参加型アセスにおけるコミュニケーションの獲得目標によって違いが出るものと考えられます。また、議論の進展などによって、ときどきの状況に合わせた臨機応変の工夫も求められるでしょう。固定的な方法があると考えないほうが適当です。

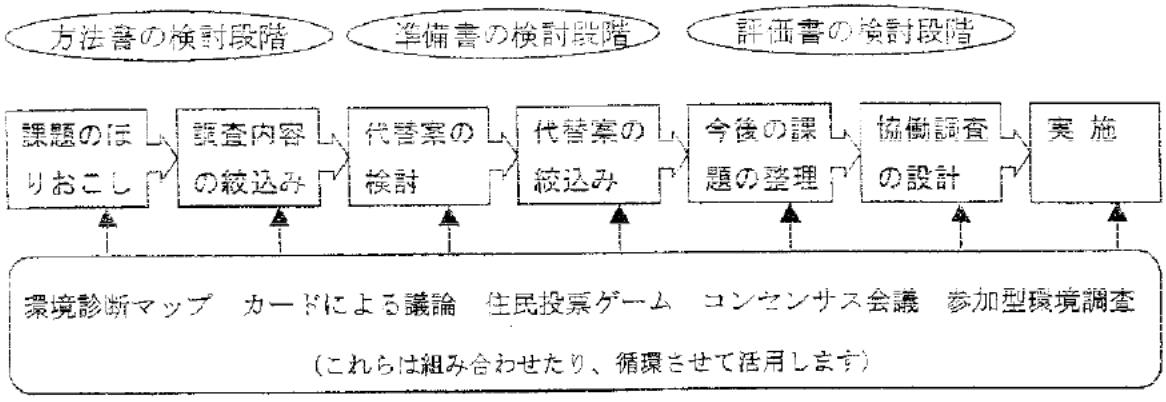



図5　ワークショップの組み立ての考え方